

今週の為替相場見通し(2023年3月6日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		135.25 ~ 137.10	135.81	134.50 ~ 138.00
ユーロ	(ドル)		1.0533 ~ 1.0691	1.0634	1.0500 ~ 1.0750
(1ユーロ=)	(円)		143.59 ~ 145.56	144.45	143.00 ~ 146.00
英ポンド	(ドル)		1.1923 ~ 1.2143	1.2043	1.1930 ~ 1.2200
(1英ポンド=)	(円)	*	162.61 ~ 166.01	163.65	161.50 ~ 165.00
豪ドル	(ドル)		0.6695 ~ 0.6782	0.6769	0.6550 ~ 0.6900
(1豪ドル=)	(円)	*	91.28 ~ 92.25	91.95	90.50 ~ 93.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 松本 悠馬

(1)今週の予想レンジ: 134.50 ~ 138.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

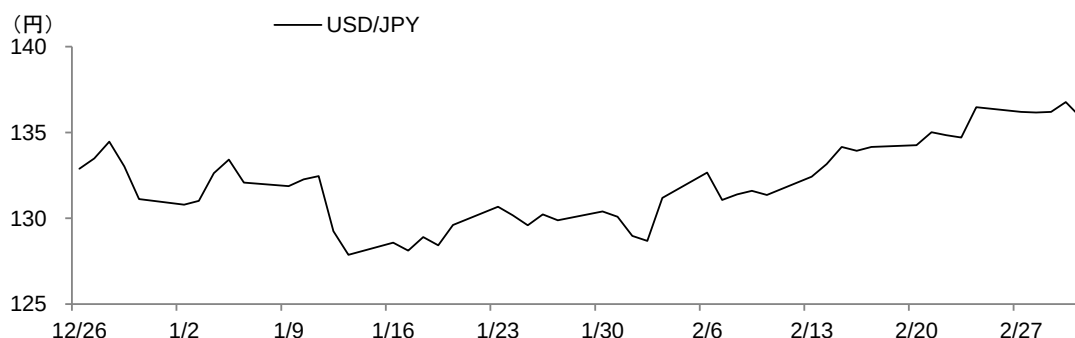
先週のドル/円相場は、136円を挟みレンジで推移した。週初27日、136.44円でオープンしたドル/円は、材料難の中、小動き。海外時間は、米金利低下を背景に136円台前半でじり安推移となった。28日、ドル/円は相場材料に欠いて引き続き136円台前半での値動き。海外時間は、ユーロ買い・円売りを背景に137円を目指す展開。その後は米金利低下につれ反落、結局ほぼ往って来いで引けた。月明け1日、ドル/円は仲値にかけ136円台半ばに上昇も、その後は小動き。海外時間は、ユーロ買い・ドル売りが波及し一時週安値となる135.25円まで下落も、米2月ISM製造業景気指数における仕入れ価格指数の上昇が材料視され、インフレ再燃懸念より米金利は上昇し、ドル/円も136円台前半を回復した。2日、ドル/円は前日の流れそのままに米金利上昇、136円台後半に続伸。海外時間は、米10~12月期単位人件費(確報)が速報値から大幅に上方修正され、賃金上昇圧力が嫌気され米金利上昇とともに一時週高値となる137.10円に値を伸ばした。137円台は昨年12月以来の高値。3日のドル/円は、ドル買いが一服し、136円割れまで下落。海外時間には米2月ISM非製造業景気指数が市場予想を上回ったこともあり再び136円半ば付近まで値を戻すも、その後は再び米金利の低下とともに再び136円割れまで下落し135.81円で越週した。

今週のドル/円相場は、底堅く推移すると予想する。週後半のイベントにかけ動意ある推移となるだろう。10日(金)に日銀金融政策決定会合の他、米2月雇用統計の発表を控えている。黒田日銀総裁による退任前最後の金融政策決定会合では先日の雨宮副総裁の発言からも現スタンスを変更する可能性は低い。また、植田新日銀総裁候補の下で急速な金融政策の転換の思惑が後退しており円安圧力が高まりやすいだろう。ただ、日本銀行より発表された債券市場サーベイでは債券市場の機能性や流動性の現況悪化が示唆されており、政策転換圧力の高まりには留意したい。米1月雇用統計含む2月に発表された米経済指標の力強さはドル買いのサポート要因となった。非農業部門雇用者数だけではなくサービスインフレに影響を与える賃金についても根強さが確認された場合、次回FOMCでの利上げ幅の織込みの加速と米金利の一段の上昇とともにドル/円の上昇を基本線としたい。ただ、最近のFRB高官の発言からは2月に発表された経済指標の結果には一過性の要因も指摘されており仮に今回市場予想を下回った場合は2月のドル買いが一気に巻き戻す可能性があり警戒したい。

(3)先週までの相場の推移

先週(2/27~3/3)の値動き:

安値 135.25 円 高値 137.10 円 終値 135.81 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 松永 裕司

(1) 今週の予想レンジ: 1.0500 ~ 1.0750 143.00 ~ 146.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、北アイルランド問題に関し英国とEUが合意に達したとの報道を受け、ポンド買い・ドル売りが波及し1.06台前半に上昇。28日、ユーロ/ドルはフランス・スペインの2月消費者物価指数(CPI、速報)が市場予想を上回り欧州金利上昇につれ1.06台半ばに続伸も、NY時間には欧州金利の反転とともに1.05台後半に反落した。1日、ユーロ/ドルは独1月CPI(速報)の良好な結果を受け一時週高値となる1.0691に上昇も、引けにかけてはドルの買い戻しで上値は押さえられた。2日、ユーロ/ドルは米金利続伸を受け1.06台前半でじり安推移。ユーロ圏2月消費者物価指数(速報)はコア指数が過去最高の伸びとなるも反応薄、欧米金利差拡大が継続し1.05台後半まで下押しした。3日、ユーロ/ドルは反発。NY時間に米2月ISM非製造業景気指数の結果を受けたドル買いに1.0589まで反落するも、その後は米金利低下を受けたドル売りに、ユーロ/ドルは1.0638まで戻し、1.06台前半で越週した。

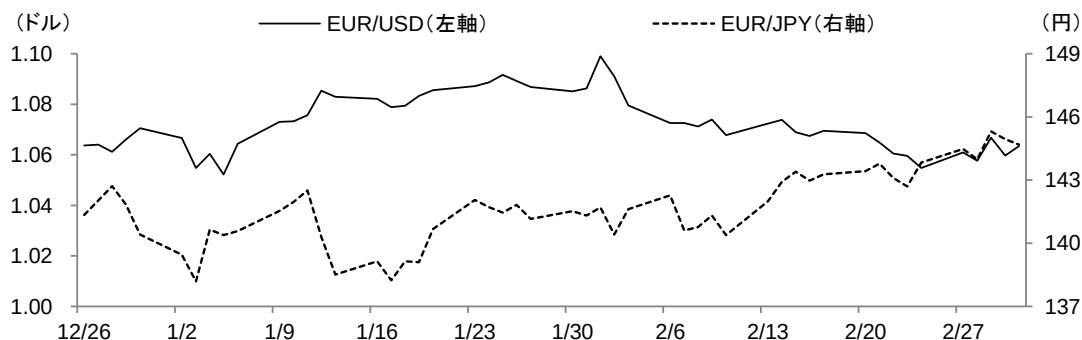
今週のユーロ/ドル相場は、ECBの利上げ長期化への思惑から底堅い展開を予想。先週発表された欧州主要国のCPIは軒並み強い結果となり、市場ではECBによる金融引き締め継続の見方が強まった。ラガルドECB総裁からも賃金、物価インフレが今後も高水準で推移する可能性を警戒する発言が見られ、ECBが早期にタカ派スタンスを崩す可能性は低い。今週は、10日(金)の米2月雇用統計が注目となるほか、欧州でも6日(月)ユーロ圏3月センチックス消費者信頼感、ユーロ圏1月小売売上高、8日(水)ユーロ圏10~12月期GDP(確報)の公表が予定される。市場は3月会合での+50bpの利上げを織り込むが、欧州経済の堅調さが引き続き確認されれば、5月以降の+50bp利上げへの思惑からユーロ買い圧力につながりそう。月後半に主要国の金融政策決定会合を控え、要人発言をきっかけとした相場の乱高下には警戒したい。7日(火)~8日(水)にパウエルFRB議長の議会証言が、8日(水)にラガルドECB総裁の講演が予定される。

(3) 先週までの相場の推移

先週(2/27~3/3)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0533 高値 1.0691 終値 1.0634

(対円) 安値 143.59 高値 145.56 終値 144.45



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

欧州資金部 森田 大貴

(1) 今週の予想レンジ: 1.1930 ~ 1.2200 161.50 ~ 165.00 円

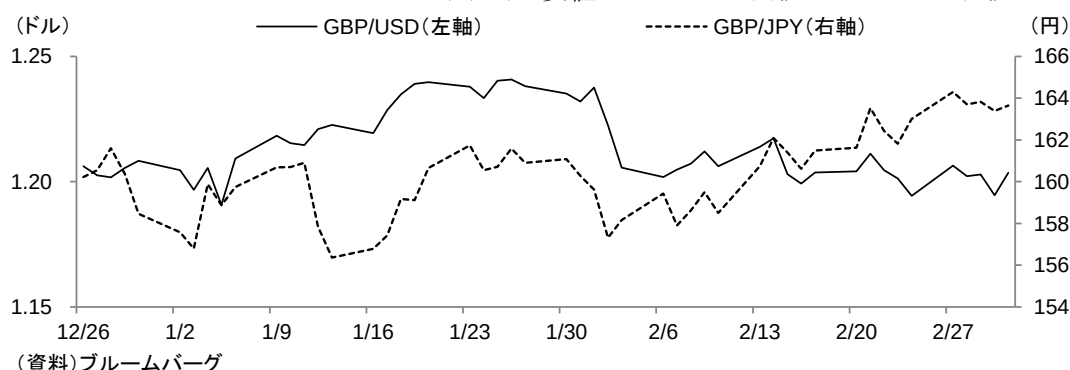
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は総じて上に往って来いとなるが、対ドルでは週末にかけ上昇し週間では上昇。対円、対ユーロではほぼ横ばいでのクローズ。週初2月27日、対ドルで1.19台半ば、対円では163円レベル、対ユーロで0.88台前半でオープン。英国とEUが離脱協定で英領北アイルランドと英本土との物流・通関手続などを定めたプロトコルの修正で合意。ブレグジット後の英・EU関係に亀裂を生じさせた長年の懸案が決着し、英ポンドは対ドルで1.20台半ばまで上昇。翌28日もこの流れが継続し、対ドルでは1.2143の週高値を示現、対円でも166円ちょうどレベルまで上昇。しかし、月末フローに加え、短期勢のポジション調整に、対ドルでは1.20ちょうどレベル、対円では163円台半ばまで下落し、完全なる往って来い。3月1日、アジア時間に発表された中国2月製造業/サービス業PMIが良好な結果となり、CNHが主導するドル売りの流れに英ポンドも対ドルで1.20台後半までじり高。対円でも164円台半ばまで切り返す動き。しかし、注目されたベイリーBOE総裁の発言は、今後の利上げはパスはデータ次第という内容であり、現状のマーケットの織り込み対比、また他の主要中銀対比ではハト派に解釈され、ターミナルレートへの織り込みは一時▲15bp程低下する中、英ポンドは対ドルで1.19台半ばまで下落。また、対ユーロでの下落が強く、ユーロ/ポンドは0.88レベルから0.8896の週高値まで上昇。翌2日、米10年債利回りが節目となる4%を明確に上抜け上昇する展開に、全般的にドル買いの流れが強まり、英ポンドも対ドルで下落幅を拡大し1.1924まで下落。同日、ピル・BOEチーフエコノミストが経済と賃金の伸びが予想以上に強いことを指摘するが、市場の反応は限定的。翌3日、米2月ISM非製造業景気指数は市場予想を上回る結果となったが、週末に向けたポジション調整に米金利は低下。クローズに向け米10年債利回りは4%を下回り低下幅を拡げ、また米株が大きく上昇する中ドル売りが強まり、英ポンドは対ドルで1.20台半ばまで上昇し越週した。

今週の英ポンド相場は、対ドルでは強含む一方、他通貨対比では相対的に上値の重い展開を予想。2月は米金利上昇、ドル買いの流れが続く、月が変わった3月も月初こそ米10年債利回りが4%を明確に上抜けこの流れが継続したものの、週末にかけて調整し結局ドルは前週対比下落。英ポンドは対ドルで1.19台前半に位置する200日移動平均線に2月以降何度もサポートされる格好となっている。今週はなにより10日(金)の米2月雇用統計が注目されるが、英ポンドが先週安値であるサポートレベルを下抜けるには一段のドル高要因が必要。米株が週末に向け有意に上昇していることに鑑みれば、短期的には2月のドル買いの調整が続くやすいと考えられ、英ポンドも対ドルではまずは強含む展開を予想する。一方、英国要因では、北アイルランド合意は大方の予想通りでありゲームチェンジャーとはならず、値動きもリリーフラーの範囲に留まっている。また、先週はベイリー総裁の発言が金利市場では材料視された。先週末時点でOIS市場は3月+25bpの利上げを完全に織り込み、また年内計+80bpの利上げが織り込まれているが、ベイリー総裁は経済データがターミナルの最大の決定要因ということを示唆している。英2月消費者物価指数が22日(水)に発表され、その翌日にMPCというカレンダーを考慮すると、現状の市場の織り込みには更なるリプライスの余地があると考えられ、先週のベイリー発言以降英ポンドは他通貨対比では相対的に弱含む展開となっているが、この流れが当面続くこととなろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(2/27~3/3)の値動き: (対ドル) 安値 1.1923 高値 1.2143 終値 1.2043
(対円) 安値 162.61 高値 166.01 終値 163.65



4. 豪ドル

金融市場部 グローバルFIチーム 木村 優太

(1) 今週の予想レンジ: 0.6550 ~ 0.6900 90.50 ~ 93.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は小幅に上昇。週初2月27日に0.6734でスタートした後、前週の米1月個人消費支出デフレーターの高含みを受けた米金利上昇から上値の重い相場が続き一時0.67割れとなるが、米1月耐久財受注(速報)の軟調な結果を受けて0.6740近辺の水準まで戻す。28日には豪1月小売売上高が発表され、堅調な内容に小幅に豪ドル買いで反応したものの、米金利上昇が止まらない展開に上値が重く、一日を通して0.67前半の狭いレンジで推移。3月1日は軟調な豪10~12月期GDPや豪1月消費者物価指数(CPI)を受けて0.6695まで下落したが、強い中国2月製造業/サービス業PMIの内容や上海株上昇を受けて買い戻され、週高値の0.6782まで上昇。海外時間には米2月ISM製造業景気指数において支払価格が大きく上昇したこともあってインフレ懸念から米10年債金利が一時4%台に乗せ、米ドル買い圧力の強まりからさらなる上値追いはなかった。2日も米ドル買いが継続し上値の重い推移。海外時間に発表された米10~12月期単位人件費(確報)は市場予想を大きく上回り、米国の雇用の強さが確認されたことで再度米10年債は4%を上回り、豪ドル相場は0.67前半での推移となった。3日は米金利が反落し始めたことにより0.67台半ばでの推移となり、海外時間に発表された米2月ISM非製造業景気指数が市場予想を上回るも、仕入れ価格が前月を下回り、米金利低下に伴う米ドル売りから豪ドル相場は堅調推移し、0.6770近辺での越週となった。

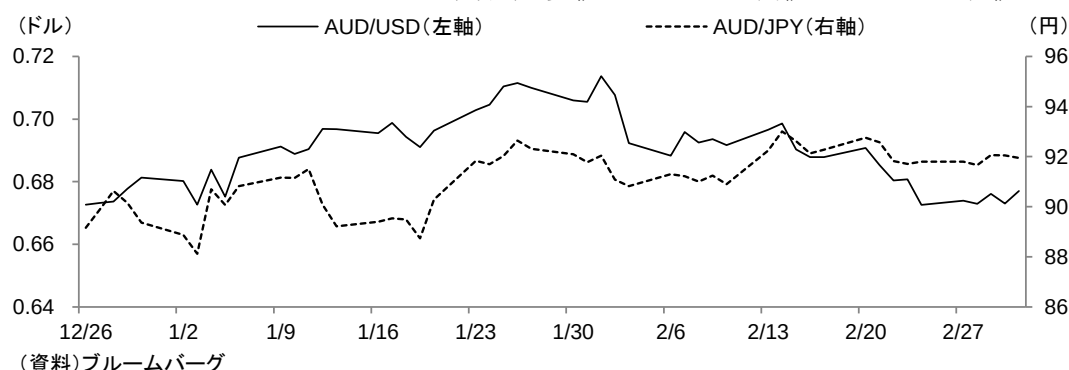
今週の豪ドル相場は上値の重い推移を予想。今週は7日(火)にRBAを予定しており、ロウRBA総裁は直近の発言にて四半期のCPIを重視しながら利上げを進めていく姿勢を示している。1月までに発表されたCPI(四半期)は連続で高い数値が確認されている一方、先週発表された豪1月CPIは予想を下回っており高いインフレ懸念は一時後退していることから、今回の会合での利上げ幅は+25bpに留まると予想され、今後の政策方針により注目が集まる。その一方、上昇を続ける米金利に吊られて米ドルが堅調な状況が続いているが、その方向性を占う米2月雇用統計の発表を10日(金)に予定している。直近の米経済指標への反応は強い結果に対して米金利高・米ドル買い、弱い場合には米金利安・米ドル売りと素直に反応しており、金利の終着点を探しているような印象だ。今回の雇用統計も強い内容が予見されており、米国のリセッション懸念が剥落してきていることから発表前までは米ドル買いがより優勢に働きやすく、豪ドル相場の重しとなると見込んでいる。

(3) 先週までの相場の推移

先週(2/27~3/3)の値動き:

(対ドル) 安値 0.6695 高値 0.6782 終値 0.6769

(対円) 安値 91.28 高値 92.25 終値 91.95



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。